寿命の縮まった話

旭川市医師会
やまが整形外科クリニック
山賀（やまが）　慎一（しんいち）

私は令和５年に脳幹梗塞を発症してワレンベルグ症候群となり麻痺を生じたが、特に寿命は縮まっていないと思う。しかし、その前に寿命の縮まる思いをしていた。

それは令和４年の春３月の日差しの眩しい朝だった。妻が札幌に行くというので旭川駅まで送るはずだった。まだ出発の時間まで30分ほどあった。我が家には３匹の犬がいる。メスのビションフリーゼのみっちゃん、メスのボロニーズのべびちゃん、オスのミックスのコタローである。みっちゃんは散歩が大好きで、太陽の出ている明るい時間に私が家にいると、私の前に立ちはだかり散歩をせがむ。その日も私に付きまとい散歩を要求した。急げばみっちゃんを満足させられるだろうと考えた。保護犬で視力の弱いコタローは散歩に行きたがるくせに玄関を出てすぐ横になるので、胸の前で袋に入れて散歩していた（**写真１**）。その日は玄関内でコタローを袋に入れたままみっちゃんのモコモコした毛の中で首輪をはめて、少し時間を気にしながら家を出た。よく晴れていて道路脇の雪山は眩しく、対照的にタイヤの跡のわだちは雪解け水が黒く光り、足元はザクザクであった。左手でコタローを抱き右手にみっちゃんのリードを持って100m位歩いたところで、急にリードの緊張が無くなり、少し先を歩いていたみっちゃんが私に近づいて四つん這いになったかと思うと、突然向きを変えて背中を丸くして振り向きもせず全力で走って消えていった。私は驚いて走り出し、コタローと一緒にわだちの中に転倒した。「みっちゃん、みっちゃーん」と大声で叫んで右手を伸ばした。妻にすぐ連絡しようと思ったが、なんとその日に限ってケータイを持っていなかった。濡れた体でコタローを抱きながら息を切らせて走って自宅に戻り、札幌に行く準備をしていた妻に知らせた。妻はすぐに警察に電話して犬の特徴を聞かれ「中くらいの、耳だけ茶色の真っ白な犬」と伝えた。みっちゃんの耳はべびちゃんにいつも舐められて茶色に変色していた（**写真２**）。私たち夫婦は車と徒歩で手分けして逃げた方向の住宅街を探した。家の前で雪割をしている人々に聞いても見ていないと言われ泣きたくなった。１時間ほど探して、もうみっちゃんには二度と会えないかもという悲しい思いがよぎった。その時妻のケータイが鳴った。特徴の似ている犬が旭川東警察署という大きな警察署に連れてこられたという。すぐに急行した。生きているのか死んでいるのか聞きそびれていた。もしかしたら車に轢かれて死んでいるかもしれない。妻の不安を和らげようと、私は運転しながら、みっちゃんの脚がわだちの水で汚れて白黒になり「もしかしたらパトカーみたいに白黒になっているかもね」と軽口をたたいたら、すごい顔で睨まれた。不安いっぱいで警察に着くと、物品庫のような殺風景な部屋に案内された。死んで横たえられているかもしれない。ドアが開けられた。石油ストーブの近くの囲いの中にみっちゃんは立っていた。私たち夫婦の顔を見てすぐに尻尾を振った。私たちは泣いた。案内してくれた警察官の方に聞くと、逃げた場所から２kmほど離れた道路の青信号を、疲れた様子でトボトボ渡っていたところを、男性が抱きかかえ旭川東警察署まで届けてくれたらしい。名前を聞いたが男性は告げずに去ったという。保護された場所は逃げた方向とは逆方向であり、さらにそこに行くまでには「環状線」という大変交通量の多い道路を渡らなければならない。生きているのが奇跡に思えた。みっちゃんが潰れるくらいに強く抱きしめた。あの時は少し急いだり、きちんと確認しなかったり、ケータイを忘れたりと悪いことが重なった。最悪の事態から奇跡的に戻ってきたみっちゃん。以後、散歩の時は必ず２本のリードと首輪をしている。今思い出してもゾッとする犬好きの人になら分かってもらえる寿命の縮まる話であった。

写真１　当時の散歩のスタイル（真冬）

写真２　みっちゃん（左）とコタロー（右）